

自由連合

Liberafederacio

W 40.4

1972

10.20

姬路市龜山354

自由聯合社

振賢：大阪 1264

④長いこと皆さんご苦労さん。自連の下糸はとつくの皆に野垂れ死んだ。そして今下糸は別の形で再生しつつある。自連に關心の人に事を幸せだと思ふ。アバヨ、タツシヤデナ

向井亨を批判しきらないかぎり 自連の総括は

永遠に終らない

尾闕弘

らない。

最初は、個別の、いわゆる「向井彦」だった。しかしその向井を余りにも永く、余りにもいろんな場所にも余りにも絶対的に、私と私たち自連社員の前に存在することを許してきたたの、一箇の「向井彦」を際限なく虚像化したものによつて、自連と自連の運動はここまでに身動きのできないほど自らを自縛してきたのではないだろうか。向井の存在をいかに大きく意識しているか、あるいは自分の発想であるかのように思ひこんでいるものか、いかに向井の影響を受けてあるかを知っているのは、そのことに気付いているのは「自連」の編集員やBアジトの常連を自称する人たちにどれくらいであるかであろう。『自連』はまさしく向井彦の取付けによつて創刊され、にもかかわらず「運動」のもつ自己運動性ゆゑに状況と共相し、成長して今日に至つたわけであるが、今その主体的でなければならぬ解体の作業においてすら、向井の発想とその圧倒的イデオロギアによつて押切られようとしている。

私たちは今、自分にとつて何井と
とは何であるのか、自分にとつて自
連とは何であるのかを問うまゝに、
何井と「自連」にとつて自分は何で
あつたかを問うことは、必ずしも逆
立ちした論理ではない。否、この内
いかり板ぎには、「自連」の主体的
解体などあり得ないからだ。さらに
は自らの内にある何井とその思惑性
の裏面を自ら摘発しないかぎり「内
なる自連」の解体はありえない。自
連の解体とは高橋和己の云うごとく
「わが解体」でもあるのだ。

正氣で「今の世の中にコミュニン
を創るのだ」と大言して、しばらく
山の中で生活していた。久し振りに
大阪へ戻つてアジトに顔を出すと、
見かけない顔も多く、少し變つた雰
囲気であつた。何よりもまず感じた

のは、そこに集つていた人たちが、
自連を讀んでいる人たちの多くが、
明らかにある種の特殊集団を形成
していることによる異相感である。
それが「自連」に関する人たちがおま
び自連によるコミュニケーション
を皮層的なものにし、上すべりの
ものになっている。なお悪いことに
それは向井彦なり「自連」なりを
徳卓として求心の性向にあること
によつて自ら隔絶感と疎外感を深
めている。求心の性向の中心に
向井がいるといつても、それは向
井にだけ理由があるのではない。
向井をそのようにしている回りが
あるからである。向井彦から「自
連」の解体が提起されたのも、ま
さにそのことを彼自身感じていた
からではないだろうか。「自連」
の解体は、本来私たちに側の側からの
提起でなければなかつたし、どん
なことがあつても、私たちは自身の
仕事でなければならなかつた。

コミュニオン建設の方に歩み出した私にとつて、正直なところ向井との「秒読み」のズレを感じてゐる。へ40号の4Vで自連にケリをつけてしまいたいという向井に對して、私は私の内なる自連と向井の存在を徹底的に総括し、解体しつくすまでへその5、6、7とこざわり続けるつもりである。向井によつて夢想され、今また向井によつて死水をとられようとしてゐる「自連」とは自分にとつて何であつたのか。向井の自連は明らかに座礁したのだ。向井は焦つてゐる。今こそ向井イザムに止めを刺す時なのだ。ここでサシでやり合はない限り、オレたちは永遠に向井の幻影に悩まされ、向井にヤラレっぱなしで不様に死にたえるしかないのだ。近親相姦の修羅場を刮出するのだ。内部対立、内部批判、内部解体こそ、われわれの健全さの要でなければなら

個人的何記

何井
孝

40号の4でおしまいにしようと思つて、その号に八自連、その死の意味Vという大の論文をかくつもりだった。杉原くやその他のにもそう云いメモもどつていた。

ところで、すっかり遠のいて音沙汰なかつた尾瀬くんが、奈良から帰つてきて、めずらしく一文をよせてきた。それがこの「向井……」である。それでみると、彼は、そのうち出ずらしいので、どうしたものかと思わず絶句した。

そして、今さらへその死の意味、
など銘うつて、誰に何をよんでもら
おうとしているのか。ひとりでさう
のおもひのみなら、イオム通信や日
記で充分ではないか。ふつとそう思
つた。

それにしても、もうぼくのなかの
自連は、いま野垂れ死んだのである
。だからともかく、ぼく個人として
は、40号の4で、自連はおしまい。
ーあとどうなるかについては、ぼく
の立場では、しらない、というより
仕方がない。 さいごにー
へ自連にとつて、きみは何であつ
たか、へ死んだ自連が、きみにのこ
したものはー。この向いをきみ
への形見分けとする。ーだが答をな
いきみには、形見は何もない。ー
長いこと、いろいろありがとう。

